

ゴンゾオ叔父

小説には、さまざまな工夫を凝らし、文章の綾も尽くして読者を楽しませるものもあるが、逆に、余計な飾りや技巧は排して、あるがままを淡々と述べて行く方向がある。リアリズム精神がそういう方法を採らせるのだが、そうしたスタイルを代表する作家の一人がこの小沼丹である。オピに「生誕百年記念刊行」と謳っているが、没後も早二十三年になる。

しかしこのごろの、作りがますます精妙で技巧も達者になった小説群のなかに置いて見ると、かえって新鮮、ああ、ここに文学の、小説の原点があるのだと、改めて思う。そう感ずるのは私だけではないのであろう、本書巻末の広告の頁には、随筆集も含めて小沼本が五冊も挙げられている。読者の確実な支持があるのだらう。小沼丹の文学は

あるがままの文章 小説の原点



小沼丹著

(幻戯書房・4320円)

今ますます、存在意義を深めているのかもしれない。

本書に収められているのは昭和十九年から敗戦を挟んで十数年のあいだに、主に同人雑誌や『早稲田文学』に発表された、いわゆる習作期の短篇。作者が大学を卒業して教員勤めを始めたころの十篇である。少年時の田舎でのエピソード、友人たちが次々に徴用出征してゆくなかでの学生生活、退廃と倦怠に沈面する日々、郊外地での空襲の来るなかでの療養生活と、描けななくなった画家との挿話、都会を焼け出されて移ってきた理

1918-96年。小説家。著書『白孔雀のいるホテル』『棕鳥日記』など。

髪店一家との淡い交流等々、作者自身の体験や周辺の見聞が描かれている。いずれも淡彩なスケッチのなかに、しかし時代の影を色濃く映し出して、小沼小説の得意なスタイルはこんな初期から既に出上がっていたのかと思わせる完成品ばかりだ。

ところで、本書には詳細な解題があつて、これらの作品の多くが後に手を加えられ書き直され、タイトルも改められて文芸誌に再発表されたことが明らかにされている。それで確かめてみると、習作のころと見えたところが、改作では消えていたりしてびっくりする。自然体であるためにも、こつしたためみない努力や工夫が必要なのだ、改めて思い知ることになる。

評 勝又浩

(文芸評論家)

もつ1冊 小沼丹著『懐中時計』(講談社文芸文庫)。親しい友の死を悼む表題作など11篇。